

昭和二十三年七月廿九日

校

校田

3

日本ノ基本戦略



太平洋戦争開始ニ方リ日本ノ採ツタ基本戦略ハ政治地理經濟、軍事ノ各方面ヨリ検討ノ上綜合シテ決定セラレタモノデアアルカラ茲ニ各方面ニ亘リ極メテソノ概要ヲ述ブルコトトスル

一 政治方面

日獨伊三國同盟後日本ヲ繞ル各國ノ動向ハ著シキ變化ヲ見セルコトトナツタ當時歐洲ニ於テハ獨伊側ト英佛側ニ分レテ戰爭中デアツタカラコノ三國同盟ハ世界ニ大ナル波紋ヲ投ジタ事ハ豫想以上ノモノデアツタ

ソノ特異ナ點ヲ指摘スルト次ノ如クデアアル

① 世界ノ大國ハ日獨伊ト英(米)佛支トノ二大陣營ニ分レ英(米)佛側ハ漸次日本ヲ敵視スル空氣ガ著シク強クナツタ

② 從來英米ノ對日態度ガ夫々異ツテ居ル所モアツタガ支那ヲ併セテ米英ノ對日共同動作ガ積極且一層密接トナリ日本トシテハ英米兩國ノ關係ヲ別々ニ分離シテ考ヘルコトハ出來ナクナツタ

3 支那ノ英米「ソ」ヘノ依存ガ一層強クナリ英米（ソ）ノ支那トノ

提携ガ逐次強化サレルコトトナツタ

4 「ソ」ビエイトト日本トハ中立條約ヲ締結シテキダケレドモ必ズ
シモ友好的デハナク英米ノ對「ソ」接近強クナツテ來タ殊ニ獨ア
戰勃發後ハ顯著デアツタ

5 中立國ノ各諸小國モ大國ノ壓迫ヲ受ケソノ好ムト好マザルトニ拘
ラズソノ對日態度ハ變化ヲ來スコトトナツタ

斯クテ日本ハ大陸ニ於テハ片手デハ「ソ」ト握リツツ片手デハ支那
ト戰爭シ且米英ノ非友誼的ナ協同的對日態度ニ對シテハ何等施スベ
キ餘地モ少ナクナツテ來タ加之一九四一年獨「ソ」戰爭惹起ニヨリ
日「ソ」中立條約ハアルモノノ世界ノ大國ハ完全ニ二大陣營ニ分裂
シテ鬪フノ形勢ヘト進ムコトヲ餘儀ナクセラレタ即チ政治的ニ見テ
日本ハ列強ノ包圍ノ中ニ置カレルトナリ日本ハ如何ニシテ之ノ
苦境ヲ打破シテ行クベキヤニ當面シタ茲ニ支那事變解決ノ必要ガ強

ニ地理的方面

ク浮ビ上リ且東亞ニ於ケル國防國家獨立ガ日本ノ急務トナツタ

日本ハ亞細亞大陸ノ東部ニ位置スル島國デアルカラ太平洋ニ對シ恰
モ日本ガ亞細亞大陸ヲ保護スル防波堤デアルヤノ觀ヲ呈シテイル又
此ノ土地ニ任ム國民ハ皆亞細亞大陸及南方諸方ヨリ移住シテ亞細亞
ノ東北ニアル日本ニ永年ニ亘リ集約セラレタヤウナ状態デアルカラ
亞細亞大陸ト緊密ナ關係ニアルノハ當然スギル程當然デアルコトニ
日本ガソノ歴史ニ於テ見ル如クソノ國防上大陸ニ足場ノアル朝鮮ヲ
重視セザルヲ得ナイ理由ガアリ日清、日露ノ戰爭モ共ニ朝鮮ノ問題
ヲ中心トシテ日本ノ安危ガ左右セラレントシテ起ツタ戰サデアアル又
滿洲事變及支那事變モ共ニ地理的方面ヨリ之ヲ見テ日本ノ國防ニ極
メテ重大ナル關係ガアツタカラ緊争ノ中心トナツタノデアアル就中ア
聯邦ノ「ソ」ベリヤ進出並ニ支那ノ革命ト其ノ後ニ於ケル航空威力
ノ長遠ナ發展トハ地勢上自然ニ大陸ト日本トノ關係ヲ層一層密接不

可分ノ状態ニ置クコトニナツタ
 一方海正面ニ於テハ日米間ニ廣々トシテ展開シテキル太平洋ノ海面
 ハ過去ニ於テハ日本ノ國防的地位ヲ強化セシメルモノガアリ第一次
 世界大戰後日本ニ課セラレタ南洋委任統治ノ領有ハ航路線ノ發達ト
 共ニソノ海正面ノ防衛ヲヨリ強クスルモノガアツタ
 然シ乍ラ之等ヲ戰略上ヨリ見テ島國タルノ日本ニ非常ニ有利ナル變
 化ヲ見セタモノデモナク地理的方面カラ謂ヘバ島國ノ弱點ヲ持
 ツソノ本質ニ於テハ依然大ナル變化ガナカツタ否寧ロ海正面ノ脅威
 ハ間接デハアルガ致命的ナモノデア
 ル大陸正面ハ直接的デハアル
 ガ漸進的ナモノデアツタ何レニシテモ島國タル日本トシテノ防禦力
 ガ航空ノ發達ト共ニ却ツテ段々喪失セラレ自國ト假裝敵國トノ間ニ
 保護地帯ヲ設クル必要ガ痛切ニ感セラレルコトトナツテキタ即チ昔
 ニ於テハ島國デアツタガ爲防禦力ガ強ク國防ガ安全デアルト考ヘラ
 レテキタノガ島國デアアルガ爲國防ハ不安デアリ防禦力ハ薄弱トナツ

テ來タノデアアル換言スレバ大陸ニ於テ列強ニ包圍セラレテキル大陸
 國家ガ數千年ニ亘リ痛感シツツモ慣レテ來タ國防ノ不安ガ武器ノ發
 展ニヨリ急ニ島國ヲ襲ツタノデアアルカラソノ島國ニスム國民ニ與ヘ
 タ心理的影響ハ特ニ大ナルモノガアルコトハ充分想像出來ル所デア
 ル
 斯クテ日本外部ヨリノ脅威ニ對シ千島ヨリ臺灣ニ至ル日本列島ヲ表
 玄關（外皮）南洋委任統治領ヲ門口トシテ亞細亞大陸（内臟）ニ勢
 力ヲ扶植シツツ廣漠タル太平洋ニ面シテ大ナル呼吸ヲナシ且大陸ニ
 依存シツツ生存ヲシナケレバナラナカツタノデアアル

三、經濟的方面

日本ハ海外ヨリ食糧並ニ物資ノ供給ヲ仰ガナケレバナラナカツタ關
 係上日本ト英米並ニ英勢力圈内ニ於ケル地域トノ貿易ガ從來盛ンデ
 アツタ
 偶々一九三七年支那事變發生シ日本トシテ最悪ノ場合ヲ考慮シナケ

レバナラナクナリ日本ハ經濟ノ對外依存態勢ト脱脚スルノ必要ヲ認
 メ逐次之ニ向ヒ努力ヲシタソノ後一九三九年歐洲ニ第二次大戰ノ勃
 發ヲ見ルニ及ンデ日米關係ハ不圓滑トナリ爲ニ日本ノ生産力ノ擴充
 整備モ不十分デハアツタガ海外ニ依存スルコトガ出來ナクナリ一九
 四〇年後期ニ於テハ六億六千萬圓ノ特別輸入ヲ實施シテ重要物資ノ
 取得蓄積ニ努メナケレバナラヌ狀況トナツタ
 即チ日本ノ國力ハ愈々

① 日本自体ノ生産力

② 日本軍威力下ノ滿、支、佛印ノ生産力

③ 蓄積ノ重要物資

等ニ依存スルノ外ナクナツタ

殊ニ米國ノ對日禁輸ニヨツテ液体燃料ノ需給ハ深刻デアツテ之ガ需
 要ヲ極度ニ規正シテモ一九四二年六、七月ニハ貯藏皆無トナル虞ガ
 アツタ

新クテ日本ハ如何ニシテ自存自衛ヲ全フスベキヤノ問題ヲ解決セネ
 バナラナクナツタ

ノ食糧問題

日本内地ノ需要ハ當時約六千萬石ト見ラレ一九四一年ニ於ケル輸
 入ハ概シテ左記ノ如ク豫想セラレテキタ

朝鮮	六二八萬石
臺灣	三一〇〇〃
泰	三〇〇〃
佛印	七〇〇〃

戰爭ノ爲泰、佛印ヨリノ輸入ガ困難 (1/2乃至2/3減) トナル場合ニ
 ハ大豆、雜穀、甘藷ヲ代用シテ其ノ缺ヲ補フ必要ガアツタ

2 石油問題

生産ハ次ノ通りデアアルガ民需ハ年一八〇萬軒デアツタ

國産	第一年度	第二年度	第三年度
人造石油	三〇〃	五〇萬〃	七〇萬〃
國産	三六萬軒	四〇萬〃	四四萬〃

從ツテ不足分ヲ軍ノ貯油ヨリ支渡スルトシテモ第三年迄民需ヲ保
チ得ナカツタ

戦争ニ入ル場合南方地域ニ於テ左ノ取得ガ可能トナリ國內貯油八
四〇萬軒ヲ加ヘレバ概ネ第三年ニ若干不足ヲ生ズル状態トナル豫
想デアツタ

第一年 八五萬軒
 第二年 二六〇〃
 第三年 五三〇〃

3. 南方資源ノ取得量

南方ノ要域ヲ短期間ニ領有シタ場合（六ヶ月後）月平均左記物資
ヲ取得シ得ルト預想セラレタ
 第二年度以後ハ完全ニ此等資源ヲ活用シ得ラレルトノ判断シテキ
 タ

- ニツケル 六〇〇〇〇屯
- 錫 一二〇〇〃
- ボーギサイド 一七〇〇〇
- 生ゴム 一七〇〇〇
- 玉蜀黍 二〇〇〇〇
- 工業鹽 七〇〇〇
- 砂糖 二〇〇〇〇

尙南方要域ノ領有ニヨツテ聯合國就中米國ノ必要トスル第一ゴム
ヲ確保シ得ルカラ之ニヨリ米（英）ノ戦争遂行ヲ困難ナラシメル

船隻問題

コトが出来ル有力ナル一要素ヲ持ツコトニナル

日本ノ保有船隻ハ一九四一年十一月頃約六七二萬屯デ定額船隻トシテハ五六二萬屯デアリ物資供給力維持上蒙傷貨物船隻ハ毎月平均三〇〇萬屯ヲ必要トシタ陸海軍ノ徵用船隻ハ概ネ左ノ如ク豫想セラレタカラ

海軍	一六〇萬屯
陸軍	一八〇萬屯
開戦初期四ヶ月間	九〇萬屯
後漸減シテ七月以降	九〇萬屯

喪失(一年八〇萬屯乃至一〇〇萬屯)拿補(第一年一〇萬屯)新造(一年四〇乃至六〇萬屯)ヲ考慮セバ長期戦遂行ハ概ネ支障可能ト考ヘラレタ

但シ第二年以後ハ喪失船隻ハ逐次減少スルト判断セラレテキタ要スルノニ日本ハ自衛自存ノ爲ノミナラズ長期ニ亘ル戦争遂行ノ

爲ニモ南方要域ヲ日本ノ勢力範圍内ニ包含スルコトガ必須デアリ之ヲ確保シ得ルヤ否ヤガ日本ノ長期持久戦ヲ完遂シ得ル鍵デアツタ對米戦ニ於テ日本ガ積極的攻勢手段トシテハ南方要域ノ重要資源ヲ獲得スルコトニヨツテ經濟的方面ヨリ米英ノ戦争遂行ヲ困難ナラシメルコトが出来ル唯一ノモノデアツタ

海軍方面

明治維新以來日本ノ軍事ハ一般ニ日清日露ノ兩戦役ヲ通ジ急速ニ發展シタ然シ日本ハ第一次歐洲大戰ニ直接武力ヲ以ツテ参加シナカッタ爲歐米諸國ニ比シテ幾多遜色ガ免レナカッタ殊ニ隣接スル國ノ軍備ガ進歩シテキナカッタノト豫想戰場ガ歐米ノ夫レト大ナル差異ガアツタカラ其ノ影響ヲ受ケテキタ唯僅ニ滿洲事變後軍事ノ近代化ヲ圖ツタニ過ギナカッタ之ニ反シテ日本海軍ハ歐米ノ海軍ニ比シ大ナル差異ナク近代的海軍タルノ容相ヲ呈シテキタ歐米ノ海軍ニ比シ日本海軍ハ長遠ナル機動力ニ於テハ稍々缺ケテハキタガ攻勢力ニ於テ

ハ優ルト謂フ特色ヲ持ツテキタ
陸軍

陸軍ハ當初獨式ヲ踏襲シ其ノ後逐次日本獨特ノ方式ヲ採用スル事
トナツテキタガ陸軍ノ裝備ハ列強ニ比シテ相當ノ懸隔ガアツタ且ソ
ノ假想敵軍ハ舊式軍隊デアツタ支那軍及近代化セラレツツアツタ
「ロシア」後ノ赤軍デアツタ從ツテ豫想戰場ト「ソ」支兩國ヲ戰
略戦法ノ關係上日本ノ戰略戦法ハ大陸ニ於ケル對「ソ」支兩國ヲ中
心トスルモノデアリ特ニ攻勢ト包圍迂同トヲ獎勵スル一貫セル戰
略思想ニ左右セラレテキタ然シテコノ陸軍ノ慣習ハ太平洋戰爭マ
デ大ナル變化ハナカツタ（陸軍兵備變遷狀況表參照）又島國デア
ル日本ノ特性上海上ヨリスル所謂上陸作戰ソノモノニ就テハ早ク
カラ準備研究セラレテキタガ之ニ反シテ海上ヨリスル遂攻（攻空）
ニ對スル防勢（禦）作戰ニ關シテハ充分ナル研究ハセラレテキナ
カツタ殊ニ此ノ種ノ陸海協同作戰ハ極メテ不充分ナモノデアツタ

陸軍兵備變遷狀況表

昭和十六年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年	昭和六年 (滿洲事變前)	平時兵力 (目標又ハ希望)	戰時兵力 (目標又ハ希望)	判 決
(6Dケ師團 ヲ希望シアリ)	51ケD	50ケD	36ケD	34ケD	24ケD	17ケD	17ケD	90 100ケ師 ヲ希望シ	支(イ) 支那事變勃發以後平時兵力ト戰時兵力トノ差ナク 支(ロ) 軍備擴張ニヨリ低備裝下シテ昭和二十年重要 タケ年計ニヨリテノ近代化ヲ企圖シ
洲滿 朝鮮地内							31ケD	51ケD	
13ケD	10ケD						裝備低下ス		

陸軍兵備變遷狀況表

年 間 整 備 量 (昭和十六年度)	昭和十六年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年	昭和六年 (滿洲事變前)	
飛行機 戰車 地上彈藥 爆彈	51ヶD (6Dヶ師團 ヲ希望シアリ タリ)	50ヶD	36ヶD	34ヶD	24ヶD	17ヶD	17ヶD	平時兵力 (目標又ハ希望)
三〇〇 二〇〇 四三會戰分 二二飛行團	内地朝鮮 滿洲支那					?		
	10ヶD							
	13ヶD							
	28ヶD							
	51ヶD	50ヶD	36ヶD	34ヶD	31ヶD 案	30ヶD		戰時兵力 (目標又ハ希望)
	90 100ヶ師 團ヲ希望シ アリタリ)	50ヶD	36ヶD	34ヶD				
	英米對クナ差ノト力兵時戰ト力兵時平後以發勃變事部支(イ)							判
	イナガノモルタレラセ備準ハ又置控ニ特テシト戰作							
	五業重要重年二十和昭ニ爲シ下低備裝リヨニ張擴ノ備軍(ロ)							決
	タシ國企ヲ化代近ノ軍テリヨニ畫計年ケ							

ニ對スル防勢(禦)作戰ニ關シテハ充分ナル研究ハセラレテキナ
カツタ殊ニ此ノ種ノ陸海協同作戰ハ極メテ不充分ナモノデアツタ

2 海軍

海軍ハ主トシテ英國式ヲ採用シテ來タ其ノ任務ハ大陸並ニ南方諸
 地域ヨリ輸入スル日本船舶ノ航路ヲ保護スル爲平戰兩時ヲ通ジテ
 日本海、支那海ヲ含ム西太平洋ノ海面ヲ確保スルコトデアツタ
 之ガ爲海軍ハ主トシテ米國海軍ト假想敵トシテソノ海洋進攻作戰
 ニ備ヘナケレバナラナカツタ又之ト同時ニ「英一ソ」海軍ノ「ゲ
 リラ」交通破壞作戰ヲ考慮スルノ要ガアツタカカルガ故ニ日本海
 軍ハ其ノ傳統トシテ對米作戰ヲ重視シソノ結果航空直協下ニアル
 戦艦ノ地位ト潛水艦作戰トニ重點ヲ傾注シ其ノ戰略戰術思想ハ優
 勢ナル米海軍ヲ如何ニシテ南洋群島要域ニ迎撃スルコトガ出來ル
 カト謂フ問題ノ解決ニ專念シタ爲ニ兩軍主力ヲ以ツテスル大キナ
 海戰主義ニ偏重スル傾向ハ戰爭勃發ニ至ルマデ終始シテ變化スル
 所ガナク日米ノ大持久戰ニ於テ長期ニ亘ル米陸海空ノ進攻ニ對抗
 スル日本ノ防務作戰中ノ執拗且決勝的ナ戰略ヲ確立スルマデニハ

到達シテキナカツタ次ニ揚グル日本海軍ノ建艦状況ハ當時日本海軍ガ抱懷シテキタ戰略思想ノ一端ヲ現ハシテキル

3. 空軍

日本航空ハ統一セラレテ獨立シテキタノデハナク陸海軍ニ分割セラレ且日本航空發達ノ歴史ハ日尙淺ク列強ノ航空ニ比シテ劣勢デアツタノミナラズ幾多ノ遜色ガアツタ然シ滿洲事變ガ支那事變ニ發展シ且航空威力ノ増大スルニ伴ツテ日本ノ朝野ハ自ラ覺醒セシメラルルコトトナリ支那事變後急速ナル發達ヲ來シタ

(A) 陸軍航空

日本ノ陸軍航空ハ主トシテ對一ソム作戰ヲ根基トシテ構成セラレ養育セラレ且之ガ用法ヲ考究セラレタノデアツタ支那事變發生直後ニ至ルマデ陸軍航空ハ戰鬪爆發ヲ主戦力トシテ地上戰鬪ニ直接協力スルコトヲ第一義トシテキタ即チ大陸ニ於ケル對一ソム(支)作戰ヲ目標ニ進ンデ來タノデアアルガ支那事變發生後中文ニ於ケル海軍航空部隊ノ渡洋航空襲滅戰ニヨツテ當時歐米ニ於テ唱ヘラレテキタ第三武力トシテノ航空重視論

年	區分					
	大正十四年	昭和八年	昭和十一年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年
偵察戰團	11	12	12	13	18	20
輕重	2	6	12	16	26	28
偵察對戰團ノ	$\frac{11}{4}$	$\frac{12}{1.0}$	$\frac{12}{21}$	$\frac{13}{33}$	$\frac{18}{45}$	$\frac{20}{50}$
戰團對	$\frac{11}{4}$	$\frac{14}{1.0}$	$\frac{21}{21}$	$\frac{24}{35}$	$\frac{28}{45}$	$\frac{36}{50}$
合計	26	36	54	70	91	106

ニ傾キ地上作戰直接協力ヲ第二義トシ航空擊滅戰ヲ重視スルコ
 コトトナツタ陸軍航空ニ關スル編教育訓練等モ從ツテ之ニ順應
 シテ大ナル變化ヲ見タノデアアル
 コノ間ニ於ケル變化ハ陸軍航空兵力(機種別)ノ增強推移ニヨ
 ク現ハレテキル之ヲ要スルニ航空擊滅戰ヲ重視シツツモ米軍ノ
 如ク全航空兵力ノ空軍的運用ニ徹スルマデノ認識ナク航空部隊
 ハ各方面毎ニ地上軍司令官ニ直轄セラレテキタ

年 度	偵察 戰團		爆 擊		偵察 對 比	戰團 對 比	合 計
	輕	重	輕	重			
大正十四年	11	11	2	2	$\frac{11}{4}$	$\frac{11}{4}$	26
昭和八年	12	14	6	4	$\frac{12}{10}$	$\frac{14}{10}$	36
昭和十一年	12	21	12	9	$\frac{12}{21}$	$\frac{21}{21}$	54
昭和十三年	15	24	16	17	$\frac{15}{33}$	$\frac{24}{33}$	70
昭和十四年	18	28	26	19	$\frac{18}{45}$	$\frac{28}{45}$	91
昭和十五年	20	36	28	22	$\frac{20}{50}$	$\frac{36}{50}$	106
昭和十六年	29	55	33	33	$\frac{29}{66}$	$\frac{55}{66}$	150

判
ノ偵察ト爆撃ノ比率ハ昭和八年頃ニハ爆撃ノ方ガ重視セラレテキル傾向カ
強クナツテキル

決
キル
2戰團ト爆撃トノ比率ハ昭和十年以降爆撃カ常ニ戰團ヨリモ重視セラレテ

海軍航空

海軍ニ於テハ陸軍ヨリモ航空武力ヲ重視シテキタ特ニ支那事變勃
發頃ヨリ海軍部内ニ於テハ大艦巨砲主義ト海空軍主義ノ何レヲ主
トスヘキヤノ二ツノ議論ガ盛ントナツタコトモアルガ前者ノ論強
ク航空ハ海軍直協ニ絶對ナリトシ空軍ノ獨立ハ實現スルニ至ラナ
カツタ

其后（開戦前）海軍部内ニ於テ航空重視ノ思想再ビ擡頭シテ航空
兵力ノ擴充ニ努力シタケレドモ全東亞ノ陸海正面ヲ通シテ第三武
力トシテ航空兵力ヲ運用スル域ニマデニハ達シテキナカツタ
海軍航空兵力（航空母ヲ含ム）ノ變遷ハ左圖ノ如クデアル

之ヲ要スルニ開戦前ニ於ケル日本ノ軍事方面ノ状況ハ航空ニ於テハ第一
三武力トシテ空軍的ニ運用スル域ニハ達シテキナカツタ陸軍ハ「ソ」
支ヲ目標トスル作戦テアリ海軍ニ於テハ主トシテ米海軍ニ對スル短期
決戦ニ重點カ置カレテキタノテアツテ對米（英）長期作戦ニ即應スル
持久決戦ヲ併用シタ三者ノ綜合セル
戰略ニ關シテハ未ダ完整セラレテキナイ状況デアツタ

三 獨伊ノ戰略

歐洲ニ於テハ一九四一年ノ後期獨伊兩國ガ歐洲大陸ヲ席捲シテ今暫クシテ獨逸ハ「ソ」聯邦艦隊ニ成功セントシテキル時デアリ伊太利ハ北阿方面ヨリ「スエズ」地峽ニ進出戰闘中ノ情勢デ一抹ノ疑點モアルニハアツタガ近東及「スエズ」附近要域ノ攻略ニヨリ獨伊ノ歐洲新秩序モ茲ニ第一段階ヲ確立スル時機ノ近キヲ思ハシメルモノガアリ次デ獨伊ハ英本土上陸又ハ封鎖ニヨリ之ヲ崩壊セシメントシテキタ之ガ當時ニ於ケル獨伊戰略デアツタ

獨伊共ニ長期戰ハ欲セザル處デアルケレドモ歐洲ニ於ケル獨英、獨「ソ」ノ協和成立ハ其ノ算少ク長期持久戰トナル公算大デアリ獨伊ハ充分之ニ對スルモノト見做サレテキタ然シテ一九四二年春夏ノ候ニハ獨ノ英本土攻略（逆封鎖）ハ豫想セラレ之ガ成功シタナラバ茲ニ歐洲ニ於ケル講和ノ可能性モ英ノ犧牲ニ於テ得ラルルト考ヘラレテキタ

要スルニ開戦前獨「ソ」戦ノ推移ハ若干ノ懸念ヲ包蔵シナガラモ歐洲
ニ於ケル獨伊ノ不敗態勢ノ確立ハ近ヅキソノ長期持久ニ對應スル戰
略モ獨伊ハ十分持合セテキルト判斷セラレテキタ

六 聯軍國ノ軍事トソノ戰略

米 國

米國ハ對日戰爭ニ於テ主要ナル役割ヲシタノデアルガ其海軍ハ
從來太平洋、大西洋、アジア艦隊ヲ（A三、O五、D一五、
S一五、W三、）ニ區分セラレ夫レ太平洋及太平洋ニ配シテイタガ歐洲ニ
於テ第二次世界戰爭ノ勃發スルト直ニ米太平洋艦隊ノ主力ハ布陸
ニ集結セラレ又新鋭艦ヲ〇〇機ハ布陸ニ増派セラレタ、比島「ガ
ム」其他ノ基地ノ強化ヲ企圖セラレ一九四一年ニ入ルト米國ノ軍
備ハ一段ト飛躍ヲシタ戰前ニ於ケル米海軍勢力ハ次ノ通りデアツタ

	現	有	建造中	計
戰艦	一三	一七		三〇
航母	六	一二		一八
巡洋艦	三七	五四		九一
驅逐艦	一六〇	二〇四		三六四
潛水艦	一〇五	八〇		一八五
計	三二三	三六七		六九〇
兵員	二一三三〇〇人			
飛行機	二四三五機			

當時ニ於ケル米海軍ノ兵員擴充計畫ハ次表ニ示サレテイル